

## グローバルに活躍するには

### 特集Ⅰ

#### 変わる大学の英語教育

～グローバル人材の素地を育む英語教育へ～

2

### 特集Ⅱ

#### 地球人財創出会議

～グローバルリーダーを育むIIBCの取り組み～

5

#### ■ TOEIC® Programの活用事例

明治大学 大六野耕作 教授インタビュー ..... 8

#### ■ TOEIC® ENGLISH CAFÉ ..... 12

#### ■ IIBC TOPICS ..... 14



目的に応じたコミュニケーションを意識できる

# グローバル人材の 素地を育てる 言語教育を

一般社団法人大学英語教育学会(以下JACET)は、高等教育機関における英語教育および言語教育関連の研究実践発表と調査研究を通じて、日本の大学英語教育の向上を目指し活動しています。大学における英語教育の変遷と現在の課題を知るJACETが「グローバル人材」についてどう考えるのか、寺内一会長にお話をうかがいました。

高千穂大学商学部教授

寺内 一 氏

## 「英語を学ぶ」と「英語で学ぶ」多様化する英語教育

JACETは、1962年に120名で発足し、現在は約2700名の会員が活動しています。英語の教員が、大学での英語教育について自分たちで整備するために始めた組織ですが、当初から一貫しているのが研究と教育を両立させた組織であることで、その点は今も変わりません。

当時と現在で違うことをあげてみましょう。まずは、1991年の大学設置基準の緩和、そして大学進学率の上昇による、大学教育の多様化です。教育のレベルも目的もさまざまになりました。次に教える人が代わっていることです。当時のJACETが想定していた大学の語学教員だけではなく、グローバルに活躍しているビジネスパーソン、ITを利用して授業をするのが得意な方など、こちらも多様化が進んでいます。そして大学の英語授業の対象も、1年生から2年生の教養課程の語学の授業が中心だったのが、大学院ではもちろんのこと、学部でも専門科目の授業を英語で行い、英語で論文・レポートを書き、英語で発表しなくてはいけないところが増えてきています。英語教育の担い手が、JACET会員の主体である語学教育者だけではなく、あらゆる分野の専門家たちも英語を媒介としてさまざまなことを行う時代となって

いるのです。日本の大学に入学する外国人留学生の数も年を追うごとに増加しており、グローバル化が教室内で起こっています。英語教育は英語という科目を学ぶだけでなく、外国語や言語を自分の専門に対してどう使うのかという視点が必要で、意味が大きく変わりつつあります。

大学の英語教育については、JACETは1983年から10年毎に実態調査を行っています。私の学生時代には19世紀の詩や文学を扱っていたようなリーディングのテキストが時事的なものになったり、それにライティングやリスニングが加わってきました。

また、先ほど申しましたように英語で発表をさせたり、さまざまなコミュニケーション活動の中でアクティブラーニングの取り組みが行われています。大学によっては、大学院の論文指導の一環として、専門科目の先生とは別に、論文の書き方を英語教員が指導する授業を設けています。あるいは、社会に出てから必要な能力を養うため、実際に企業と組んでさまざまなことを始めています。英語の先生が教室内で一方向の授業をするだけではなく、産学連携等、さまざまな人と協力し学生に学ぶ場所を提供している大学もあり、今後はもっと、このような傾向が増えてくるでしょう。



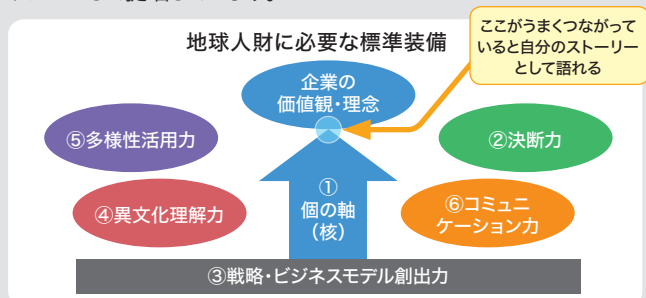
## 大学英語教育学会(JACET)第56回国際大会 IIBC発表レポート

2017年8月29日～ 8月31日に開催された大学英語教育学会第56回国際大会において、IIBCは「グローバル人材育成の課題と展望」と題した発表を行いました。

### グローバルリーダーに必要な「個の軸」

発表者：GHRD室 山崎暢子

ビジネス環境の複雑さが飛躍的に増し変化が加速する昨今、多様な個人を内包した組織を、世界を視野に入れて成長させ続けるリーダー人材が必要とされています。IIBCでは、地球人財創出会議を通して、下記の6つをリーダー人材(=地球人財)に必要なスキルとリテラシーとして提唱しています。



中でも「個の軸」は、地球人財の核となる概念です。以下の内容は、第15回地球人財創出会議で株式会社LIXILグループ 執行役副社長 人事総務担当(当時)の八木洋介氏からうかがいました。

日本人の多くは子供の頃から「人に迷惑をかけるな」「思いやりを持って」といった抑制型の教育を受けて育つ傾向にあります。「Be yourself(自分らしくあれ)」と育てられてきた欧米人などと対峙する

時、どうしても押されがちになりますが、それでも個の軸を持つことで「ここだけは譲れない」という価値観を明確に表明できると言います。ただし、軸を持つためには、自分がこれまで生きてきて大切にしていることを認識し、自分の軸として一貫性のあるストーリーにするプロセスが必要とのことです。

個の軸をしっかり持つ、つまり「ブレない」こと、そして企業理念と個の軸をつなげ企業理念を自分のストーリーとして語ることができること。それらが、組織をリードする地球人財には必要です。リーダーとして最後に「これ!」と決めきるには個の軸からくる「思い」が必要です。思いを込めた意思決定にはストーリーがあり、それゆえ人は共感してリーダーについてきてくれるのです。

また第24回地球人財創出会議では、「コミュニケーション力」をテーマに議論しました。コミュニケーション力とはメッセージによって、相手を動かす力。リーダーとしてメッセージを発信する際のポイントは、①オーディエンスの心をつかむこと、②複数のスタイルを持ち合わせる、③場に相応しい語彙と表現を駆使すること、④場に最適なスタイルを選択すること、の4つが挙げられます。上記の③場に相応しい語彙と表現を駆使することについては、次の三木の発表で説明いたします。

### 多様なコミュニケーション形態を捉え実践経験を積むことが重要

発表者：R&D室 三木耕介

IIBCでは、JACET EBP(English for Business Purposes) 調査研究特別委員会との共同研究として、2012～2015年にかけて「英語による会議における困難」についてリサーチしました。主に企業の管理職を対象にウェブアンケートを行い、調査結果を書籍『ビジネスミーティング英語力』(朝日出版社)にまとめております。その中で、会議を円滑に進めるためには、英語力の向上だけでなく、アジェンダや議事録の作成をはじめとする会議固有のプロセス・ルールといったものを把握し、会議の目的・ゴールを共有しながら相互理解を図ることが極めて重要であることが確認されました。



今回は、その結果も踏まえながら、新たに入社1年目から5年目までの業務で英語を使用している若手社員を対象に「業務における英語について現在直面している課題や今まで学んできた英語との違い」に関してウェブ調査を行いました(サンプル数:190名)。回答者の業務における英語使用シーンとしては「Eメール」「専門文献を読む」といった業務が多い一方で、今後向上させたい能力については6割以上の回答者が「スピーキング力」もしくは「スピーキング力とリスニング力」を挙げています。また身に付けたい業務能力としては「会議で自分自身の意見を伝える力」「専門領域を含む語彙力」という回答が

比較的多く、それらを身に付けるために必要な手段として、8割以上が「実践の場(実践経験)」と回答しています。今まで習得してきた英語とビジネスに必要な英語の違いについては、約7割の回答者が「異なる」と回答した上で、例として下記のような違いを挙げています。

- 目的が異なる、お互いが理解できたかどうか重視される、完璧さよりとにかく伝えることが目的
- 相手がいる、インタラクティブ、敬語やニュアンスの理解が必要
- ビジネス特有の言い回しやビジネスシーン別の英語が存在する

会議に関する先行研究や今回の調査結果から、プロフェッショナルの世界で生き抜いていくためには、業界・職種・シーンといった分野別に、多種多様なコミュニケーション形態が存在することを理解し、各形態における「目的」や「相手」、「言語(英語)の使われ方」の違いを意識的に捉えることが必要であると言えるのではないのでしょうか。広告・宣伝で使用される英語表現とIR情報で使用される英語表現は全く同じということはないです。またプレゼンテーションなど複数人を相手に話す英語と1対1の電話で話す英語のパターンや言い回しについてもそれぞれに特徴が存在するはず。そして、その違いや特徴の存在を認識しながら、自分にとって必要なコミュニケーション形態を見極め、擬似的なものも含めた実践経験を通じて、よりオーセンティックな英語力を身に付けることが重要だと思われま



スイスのビジネススクール・IMDの北東アジア代表。早稲田大学政治経済学部卒業後、フランスの経営大学院INSEADとESCPに学ぶ。日本興業銀行、ボストンコンサルティンググループ、リクルートを経て2010年よりIMDに参画。

## 高津 尚志

## 古森 剛

株式会社CORESCO代表取締役。1998年、ペンシルバニア大学ウォートンスクールでMBA取得。マッキンゼー・アンド・カンパニーを経て2005年マーサージャパン入社、07年同社代表取締役社長に就任し、14年からシニア・フェローを務める。

IIBCがグローバル人材育成プログラムの一環として、2012年から開催しているのが「地球人財創出会議」です。企業の人事責任者、グローバルリーダー育成担当者など、グローバル人材育成に問題意識をもつ方を対象に、グローバル人材育成に関する諸問題・課題について考え、学び合う場として、少人数のインタラクティブセッション形式で開催。単にゲストスピーカーの話聞くだけでなく、参加者も意欲的にディスカッションに参加し、互いに刺激を与え合い、気づきを得たり、学んだりするきっかけとなる場を目指しています。この5年間で、27名もの第一線で活躍されているリーダーをゲストスピーカーに迎え、開催してきました。

今回は、ファンリレーターとして会議をリードしていただいているIMD北東アジア代表 高津尚志氏と株式会社CORESCO代表取締役古森剛氏の対談を、書籍『「地球人財」がグローバル時代を勝ち抜く』より抜粋してご紹介します。

### 「国際化」から「地球化」へ

**古森:**以前から海外進出に積極的な日本企業は数多くありましたが、最近では本気度が上がっています。経営にとっても「人財」の地球化は切実なテーマになりました。

**高津:**かつては国際化、インターナショナルの時代がありました。日本と米国、日本とドイツというように、国際化は2つの国があれば成立します。「グローバル化」とカタカナで表すと、大事なニュアンスがこぼれ落ちてしまうので、あえて日本語で「地球化」という言葉を使いますが、現在の「地球化」の時代には、あらゆる国の人たちと、いかに理解し合えるかが問われています。

**古森:**バイラテラル(双方向)からマルチラテラル(多方向)へという変化にともない、政治、経済、企業活動の複雑性は一気に増しました。以前と比べて、マネジメントがはるかに難しくなったと実感している企業幹部は多いのではないのでしょうか。

**高津:**IMDの教授たちと「グローバル化(地球化)とは何か」という議論をすると、「多様性」「相互依存性」「複雑性」の3つの概念に収斂します。簡単にいうと、多様なものが相互に依存する結果、複雑性が増す。それがグローバル化の本質です。

**古森:**多様性が増大するとともに、一方では共通部分も強化されています。代表的な分野は金融と情報でしょう。お金と情報は軽々と国境を越え、ちょっとした変化に反応して世界中を駆け巡っています。

**高津:**共通化しているものには、英語もあります。とりわけ、世界のリーダーのコミュニケーションスタイルは、みんな似ていますね。彼ら彼女らが国際会議などの場で話すスピーチを聞いてみると、語彙やスピード、聴衆に語りかける姿勢などがほとんど同じことに気づきました。

### 強靭さとしなやかさの両方を併せ持つコミュニケーション

**高津:**現在のビジネスリーダーにとっての英語は、明治時代の日本のリーダーにとっての標準語と似ています。明治維新後、各藩出身者間のコミュニケーションがうまくとれずに苦労していました。統一国家づくりに関わる人たちがそれぞれののお国言葉で話しては議論にならないし、まとまりません。現在、同じようなことが、地球スケールで起きているといえるかもしれません。つまりは地球的なビジネスの場において、英語が標準語になってしまった以上、他の選択肢はありません。

**古森:**特にトップマネジメント層にとって、コミュニケーションの対象は部下だけでなく、これから入社するかもしれない人たち、顧客、取引先など多様な人々です。そして同じ英語であっても、それ

が自分たちの世界に閉じた言葉であれば地球ビジネス向きではないですね。さまざまな国の人に対して、ある程度その国のバックグラウンドを理解した上で、心をつかむメッセージを提示できなければ、地球的なマネジメントの実践は難しい。相手の個別文脈をとらえた上で、相手の心にタッチしようとしているかどうか。そこは技術とか知識というより、感性の問題なのかもしれません。

**高津:**今の話で思い浮かぶのは最近よく使われるようになった「Resilience」という言葉です。強靭さとしなやかさの両方が含まれた概念ですが、コミュニケーションに引き付けていけば、相手の文化に合わせる柔軟性と同時に、自分らしい確固たる信念や価値観を併せ持つことが求められる時代になりました。

## 多様性活用には判断を保留する能力が大事

**古森:**先ほど多様性の話がありました。日本人だけでなく、どこの国の人であっても、多様性にあふれた環境はあまり居心地がいいものではないと思います。しかし、だからといって無視したり顔をそむけたりしたのでは何も生まれません。地球人財に必要なものは何かと問われてあえて1つだけ挙げるとすれば、「異質なものに会った時、それをいったん受け止める感覚」だと思います。

**高津:**全く同感です。文化や習慣、ビジネスに対する考え方などが異なる人の言動に対して、すぐに判断せずに一瞬のみ込んで考える「判断を保留する能力」は重要です。一瞬タメを作って考えることで、言動の背景にある文化や習慣の違いが見えてくるでしょう。

**古森:**同じことを身近な言葉でいうと我慢です。「多様性活用の前に我慢が大事」とよく話していますね。この我慢を英語でいうと、耐え忍ぶ「Perseverance」ではなく、寛容と訳される「Tolerance」です。よく「日本人は我慢強い」といわれたりしますが、ここでいう我慢はちょっと違います。

ただ、地球人財にとって我慢は欠かせないコンピテンシーですが、日本社会にはこれを鍛えにくい構造があるのではないかと感じています。

**高津:**その1つが同調圧力です。よくいわれていることですが、日本社会では「みんなで仲よくしましょう」「みんなで何かをやりましょう」という類の話が非常に多い。異質なものに対する寛容性が比較的低いのは、その裏返しといえるかもしれません。とはいえ、最近は徐々に変わりつつあるとも感じています。例えば企業ではワークライフバランスへの関心が高まっており、育休を取得するお父さんも出て来たようです。子育てや地域活動に関わることで、いつものビジネスとは異なる多様性に触れ、そこから学ぶことはたくさんあります。

**古森:**多様性への理解を深め、企業またはリーダーがボタンを押せば、社員たちは変わるでしょう。企業における多様性の受容と活用は日本社会を変える可能性があります。

## 相互理解をベースに価値を生むのがリーダーシップ

**古森:**多様性の中で「いきなり決めつけないこと」の重要性を先ほど議論しましたが、その一方で、リーダーにとっては不確実性の中で決めきる力も大事だと思います。

**高津:**IMDでのグローバルリーダーの定義は「現在と未来の不確実かつ複雑な環境において、組織の変革の旅路を形作り導くことができる」というもの。不十分な情報しかない、明確な答えもない中で、何らかの意思決定や判断を下したり、人の心を動かしたりする能力が、今のリーダーには求められます。

**古森:**決めてしまいたくあることを決めない力、決めたくないことを決める力の両方がリーダーには必要です。難しいことではありますが、訓練すればできます。

**高津:**古森さんから、リーダーが適切なボタンを押せば社会を変えようというお話がありました。これは冒頭で触れた相互依存性にも関係します。いまやソーシャルメディアなどを通じて、リーダーだけでなくあらゆる人が世界とつながっています。

**古森:**たとえば東日本大震災の時には、ソーシャルメディアを通じて、海外の多くの人々が、日本人のもつ忍耐力や自己犠牲の精神に対して感嘆の声を上げました。このような美徳について、日本人はもっと自信をもつべきではないかと思えます。しかし、こうした美徳を基盤とするリーダーシップを体現しているリーダーが海外で活躍する事例はまだ少ないですね。


**高津:**相互理解という観点で気になっている点が2つあります。日本人の尊ぶ価値観や美徳をアピールすることは大事ですが、それは相手にとって意味があるのかということ。そしてもう1つは、外国

人のもつ文化や価値観を、どれだけ理解しようと努力しているのかということです。これまで日本企業は海外から多くのことを学びましたが、最近はややこの姿勢が弱まっているのではないのでしょうか。

**古森:**リーダーに求められるのは、自分とは異なる考えや文化をもった人たちとの相互理解をベースに、どのように働きかけて価値を生み出すか、あるいはよりよい方向に集団を導くかということ。どのような集団であっても、リーダーシップの本質は似ています。

**高津:**最近の学校教育は多様なものの中から答えを見出す力を育てる方向にシフトしつつあるのではないかと印象があります。また企業内の教育も、地球人財を意識したものになりつつあります。

**古森:**教育やビジネスの分野で望ましい方向に動き始めたことは確かでしょう。この取り組みを継続し、さらに強化する必要がありますね。



お2人の対談全文は、書籍『地球人財がグローバル時代を勝ち抜く』に収録されています。本書は2012年から開催してきた地球人財創出会議の講演と議論の内容をまとめたもので、企業の人事ご担当者をはじめ、経営に携わる方々やご自身がグローバルに活躍したいと考えておられる方々に、ぜひ手に取っていただきたい一冊です。

【編者】 一般財団法人  
国際ビジネスコミュニケーション協会  
【発行】 ダイアモンド社  
【体裁】 A5版 208ページ  
【価格】 1,500円+税

# 多様性と変化のグローバル社会で活躍する 地球人財に大切なのは 「変化を柔軟に受け止めるオープンマインド」

レノボ・ジャパン株式会社

執行役員 人事本部長 うみなみ まさお 上南 順生 氏



第25回地球人財創出会議ではゲストスピーカーにレノボ・ジャパン株式会社 代表取締役社長 留目真伸氏を迎え「世界において日本の強みをどう打ち出すか」をテーマに登壇していただきました。

今回は、レノボ・ジャパンでヒューマンリソース(人事・以下HR)を担当している上南順生氏のインタビューをご紹介します。

## さまざまな企業が集まったことそのものが 異文化交流

レノボは元々中国の企業ですが、2005年にIBMのパーソナルコンピューター部門を買収したことを皮切りに、M&Aや買収でさまざまな国の企業の事業を受け入れてきました。現在のレノボグループは従業員数約52,000人、160カ国で事業を展開するグローバル企業となっています。事業領域も、世界シェア1位のパソコンだけでなく、サーバー、スマートフォン、スマートデバイスなど、どんどん拡大しています。

日本では、2011年に日本電気(以下NEC)との合併会社「レノボNECホールディングス」を設立して、国内パソコン市場におけるシェア1位のメーカーとなりました。国内の従業員数は約1800人ですが、この中にはセールスだけでなく、ThinkPadの開発拠点である横浜の研究所や、米沢の生産工場、群馬の修理工場などの社員も含まれています。



日本で働いていても、レノボというグローバル企業の一員であり、英語によるコミュニケーションは日常です。例えば私は日本のHR担当責任者ですが、私の上司にあたるアジア・パシフィックHR責任者はインド人です。その前の上司はオーストラリア人、さらにその前はアメリカ人でした。開発、製造などの部門も、全世界のエンジニアと英語でコミュニケーションしています。レノボでキャリアアップするためには、英語は必須だといってよいでしょう。

レノボはIBM、NECをはじめ、さまざまな企業文化を持つ会社が1つに集まり、今の姿になりました。そのこと自体が異文化交流です。そのような環境でうまくコミュニケーションをはかり、

仕事を円滑に進めるための大切なファクターの1つが、多様性を理解し、強みにできるかどうかです。また私と上司の例を挙げますが、日本人の私とインド人の彼では、会議中の時間の感覚も少し違います。30分の会議の中でも、私が重視すべきだと考える内容と、彼が大切だと思って時間をかけたい内容は違います。でもそれは、国の違いというよりは人の違いで、日本人同士でも異なる考え方をしている人と同じです。違いを容認する前提で自分の意見を言い、多様性を強みにできることがどのような環境に置いても大切です。

## 目的を共有することで違いは乗り越えられる

違う文化を持つ人が一緒に働くことになった時、当然うまくいかない場合もあります。そのような時にも衝突せず協力するために必要なのが、「目的の共有」です。すぐに達成できるような簡単なものではなく、全く手の届かないものでもない、協力すればなんとか手が届くような「少しだけ」高い目的があれば、人はささいな違いにこだわったり腹を立てたりせず、協力して仕事ができます。目的やターゲットをうまく設定するのはマネジメントの役割で、「成長する」「世界一を目指す」「最も世の中に貢献する会社になる」といった企業の目標に基づいて、目先のストレッチゴールをうまく社員に提供することで、異文化を楽しみ、壁を乗り越えることができます。

変化の激しい時代を生き残るためには、一人一人の持つ専門性を本当の意味で強みにし、ビジネスとして社会に貢献する、世の中のために変わり続ける組織になることが必要です。そのために必要なのがオープンマインド、すなわち違いを柔軟に受け止められる心の柔らかさです。英語の学習への取り組みもその1つ。たとえ最初は苦手だったとしても、レノボという企業の中で真摯に英語に向かう人は、学習能力の高い人であり、結果いい仕事に結びつきます。TOEIC Listening & Reading Testのスコアは英語力の確認に活用していますが、実際に500点台から900点台に成長する社員もいて、素晴らしいことだと思います。

レノボにいて、160カ国の社員が「レノボをもっといい会社にして、世の中に貢献しよう」という強い意志を感じます。エクセレントカンパニーになれるかどうかは、その意志を共有し、社員を動かしていくリーダーシップが取れるかどうかで決まるのだと思います。地球人財とは、まさにそのような人材となり得る人でしょう。

# 学生が自分の力を世界で発揮するためには、 英語は必須

## 4技能を評価できるTOEIC® Testsは 求められる英語力の基礎になる



——— 明治大学 政治経済学部 取り組み ———

全学でのTOEIC Testsの活用や200以上の海外留学促進プログラムにより、グローバル人材育成に力を入れている明治大学。中でも政治経済学部は、4000人の学生のうちおよそ5% (約200名)が毎年海外留学を経験しています。同大学副学長(国際交流担当)・政治経済学部教授の大六野耕作先生に、同学部の留学プログラムについてお話をうかがいました。

### 異文化や多様な価値観と接する機会を増やしたい

政治経済学部では、2008年頃から、学部としての特徴を打ち出すために国際化に取り組み始めました。私が学部長になった時に留学提携先を増やして、現在は政治経済学部だけで41の海外留学促進プログラムが動いています。

こうした留学プログラムに参加する前の準備段階で、実践的な英語のプログラムとして用意しているのがACE (Advanced Communicative English) です。前身のEPC (English Proficiency Course) から数えると20年以上になります。このプログラムは、ネイティブスピーカーの先生やTESOLを終了した先生を中心に、英語の4技能に特化して学生のコミュニケーション力を養成するもので、6単位まで通常の英語の単位に振り替えられるようになっていきます。同プログラムは、1年生から受講可能ですが、希望者が多いため、現在はTOEIC L&R520点以上を参加資格としています。長期留学や海外で学位を取得する学生の多くがACEの経験者です。

次の段階の取り組みとしては「トップスクールセミナー」です。GGJ (文部科学省のグローバル人材育成教育プログラム) の一環

で、世界のトップスクールから先生を客員教員として招き、8週間ほど、集中的に英語で専門科目の授業を行っていただきます。そしてその先には、パークレー校をはじめとするカリフォルニア大学各校、スタンフォード大学、ペンシルバニア大学、ハーバード大学、ケンブリッジ大学等での6週間から12週間のサマーセッションやサマースクールが待っています。

本学全体の取り組みとしては、意欲のある学生が英語に接する機会をもてるように、全学で百数十科目ある英語で行われる授業を、学部を横断して受講できるようにしています。また短期の海外留学生受け入れを積極的に行っており、タイ、フランス、アメリカ、オーストラリア、中国、シンガポールなどから来る海外留学生に学生サポーターをつけることで、キャンパス内外でさまざまな交流を促進しています。

多様なプログラムを通じて、学生が異文化や多様な価値観と接することができる機会を増やしたいと考えています。

### 海外留学へもTOEIC® Testsのスコア採用を働きかけ

グローバル人材というのは、単に英語を話せばよいということではないと私は考えています。政治経済学部としては、ビジネスパーソン、国際的なジャーナリスト、国際機関やNGOを目指すような人を育てることを目標にしています。英語教育はそれを実現する手段の1つであって、「学生が自分の力を世界で発揮しようとしても、英語力がないからできない」という状態を克服したいと考えています。

TOEIC Testsについては、企業を中心に英語能力が求められるようになってきたことを受けて、約20年前から導入の取り組みを進めてきました。新入生は全員受験し、政治経済学部では1・2年生は年2回、3・4年生は年4回までIPテストを受験できます。企業は、単に英語を話せるだけでなく、交渉までできる人材を必要としていますし、そういう人材を育てていきたいと考えているでしょう。

2技能から4技能へと大きく舵を切ったTOEIC Testsは人材育成の基礎になると思います。

今留学している学生たちも、帰国したらTOEIC S&Wを受験して、英語の発信力がどのくらい上がったかを確認します。実は明治大学では、留学時に受入先に提出する英語テストのスコアとしても、TOEIC Testsを使用しています。これまでのデータを見ると、TOEIC L&Rのスコアが730点以上あれば、本人の努力次第で英語による講義を受け、優秀な成績をあげることができることもわかっています。カリフォルニア大学のパークレー校やロサンゼルス校はTOEICスコアで入学資格を認めていますし、他の大学にも、受け入れ時の成績基準として積極的にTOEIC Testsスコアの採用を働きかけています。



## より高度なプログラムへのニーズが増えている

国際化への取り組みは、今のところ成功していると思います。でも、ここからはもう少し違う戦略を考える必要があるかなとも考えています。

1つは中・高等学校の英語教育が変わり、今後は本格的な4技能試験を前提とした入学試験が始まります。こうなると、大学には初めから4技能の高い学生が入学してくることになります。現実には、政治経済学部が昨年からは始めたグローバル型特別入試は、「将来海外に出たい人」を対象に4技能の試験とテーマエッセイで選考するのですが、TOEFL iBTが80ぐらいの学生が17名、入学してくれました。理由を聞くと、明治大学の海外留学促進プログラムを知っていて、志望したということです。受験生の意識に大きな変化が生じてきているので、内部の教育のあり方も考えなくてはなりません。

もう1つは留学先ですね。語学を中心にした短期留学ではなく、ダブル・ディグリー（明治大学と留学先の大学で2つの学位を取得可能）、デュアル・ディグリー（5年間で明治大学の学士号と留学先

の大学で修士号を取得可能）といった、高度なプログラムへの需要が増えています。これまでデュアル・ディグリーやダブル・ディグリーのプログラムはテンプル大学、ノースイースタン大学で実施してきて、来年からはアリゾナ州立大学のプログラムが始まります。サンフランシスコ州立大学、ボストン大学、ペンシルバニア大学からもオファーをいただいています。

もう1つ、ニーズが高まっているのは、海外でのインターンシップですね。ワシントンセンター（<http://www.twc.edu/>）というNPOでは約1カ月のインターンシップを受け入れています。語学テストのスコアとしてはTOEIC L&R 550点から600点以上が求められます。インターンシップの場合は、TOEIC Testsが受け入れ基準として使われているケースが多いです。



## グローバル人材が活躍するためには英語が近道

明治大学の学生を世界に出すプログラムに取り組み始めてここ10年ほど経ちますが、順調に結果を出せています。実際、2009年度には355名に過ぎなかった海外への年間留学者数は、2016年度末で1503名、4.5倍になりました。最終的な形は、英語と専門科目が融合した形になることは見えているのですが、これからはそこに到達するために、どのようなルートでどんな学習をすればいいか、明示的に見えるようなコースを作らなくてはいいでしょうね。

今後は、パークレー校でのサマーセッションを終了した学生が、続けて秋学期と次の春学期まで在籍できる、コンカレントプログラムを導入しようと考えています。英語力の基準が少し上がります

が、クリアできる学生は相当数いると確信しています。また、ペンシルバニア大学のEnglish Language Programを明治大学で提供する準備をしています。アカデミック、ビジネスなど、目的別のクラスです。

グローバル人材というのは、どんな国の人も、どんな価値観を持っている人も、同じ場所に立ってお互いに議論し、違いを認識し、その上で共通の仕事ができる人だと思っています。そのような人が力を発揮し、世界で貢献するには、国際語である英語を使えることが最も近道。明治の学生にはぜひ、そうなってほしいと思っています。

## TOEIC® Testsの勉強が英語のコミュニケーションに役立っています



政治経済学部4年 野口陽一さん  
(ノースイースタン大学 ダブル・ディグリープログラム参加者で昨年度は学部長表彰を受けた)

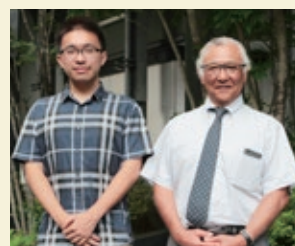
私は明治高校の出身です。大学では留学を視野に入れていたので、その前提で同大学の学部を検討しました。政治経済学部を選んだのは、各学部の先輩を見ていて、政経に進んだ方が一番海外に目を向けているように感じたからです。またACEプログラムについても魅力を感じました。

英語学習は、高校3年の春休みからTOEIC L&Rの勉強を始めました。入学後すぐに受験した時のスコアは800ぐらいでしたが、ACEプログラムを1年受けた後は、900以上に上がりました。

TOEIC L&R対策でBBCやABCなど英語のラジオをひたすら聞いてネイティブの話す音に慣れたり、TOEIC S&Wの対策でスピーキングの練習を独り言のように続けていたことが、

実際の英語のコミュニケーションにすごく役立っています。留学先でエッセイのテストを受けた時に、TOEIC S&Wのために勉強して来た文法が役立ち、英文がすらすら書けたのは、とても気持ちよかったです。また、TOEIC Testsの勉強を通じて、毎日5分でも英語にふれようとする意識がついたことが、実際に留学して毎日英語を話さなきゃいけないというストレスを軽減するのに役に立ちました。

将来は大学を卒業後、一度企業で働きたいと考えています。社会公益にかかわる仕事をしたいので、民間であれば金属やエネルギーの専門商社などが志望です。その後、40歳ぐらいになったら学問としての経済を突き詰めるために大学院に行きたいです。



記事の関係上、同ページの掲載は終了いたしました

記事の関係上、同ページの掲載は終了いたしました



### ネイティブと少人数のグループで自由に会話を楽しむ「フリートーキングテーブル」

「フリートーキングテーブル」はネイティブスピーカー 1人に対して4人の参加者で45分間グループトークできるイベント。抽選で選ばれた約100名の参加者の顔ぶれは、学生やビジネスパーソン、主婦、教員、フリーライターなどさまざま。中には親子での参加もありました。

3人のネイティブスピーカーは三者三様の進め方で、仕事や趣味、スポーツの話から、日本の魅力、日米の恋愛事情まで、幅広いテーマでトークを盛り上げました。各テーブルからは毎回笑い声が絶えず、参加者の皆さんはリラックスしながら会話を楽しんでいました。



参加者に応募理由をうかがうと、「日頃なかなか英語を話す機会がない」という声が多く上がりました。また、「来年からアメリカのディズニーワールドで働きたいと思い、英語を話せる場所を探していた」、「卒業論文で外国人にインタビューする必要があり、スピーキング力を上げたかった」などの回答もありました。

イベントの感想をうかがうと、「いつも1人で教科書と向き合っていたが、リアルな英語が聞けて楽しかった」、「ネイティブスピーカーから、英語の勉強方法のアドバイスをもらえてよかった」などの声がかえってきました。中には、「リスニングはできても、うまく言葉が出てこなかった。もっと英語の勉強を頑張ろう、とい



う良い刺激になった」という方も。親子で参加した大学生の娘さんからは、「母に誘われて参加したが、会話を通して自分の勉強が足りていないことがわかった。これからはもっとネイティブスピーカーと話す機会を増やしたい」と、熱意がうかがえました。

さらに、「また参加したい」という声をたくさんいただき、「あっという間だったので、もう少しじっくり話したかった」、「こういった英語を話す場は必要。もっと機会を増やしてほしい」、「期間限定ではなく、常設にしてほしい」という要望もいただきました。



人気DJやネイティブスピーカーと英語で楽しく会話ができる

# TOEIC® ENGLISH CAFÉ

presented by IIBCを大阪で初開催

## 「Enjoy Communication」がコンセプト

2017年8月23日(水)～25日(金)、グランフロント大阪 パナソニックセンター大阪内のKomin Cafeに「TOEIC ENGLISH CAFÉ presented by IIBC」を期間限定でオープンしました。「TOEIC ENGLISH CAFÉ」は英語で話す機会を提供するカフェとして過去2回東京で開催し、大変好評だったことから、大阪でも開催することとなりました。

期間中は、英会話を楽しめる「SPEAK UP NIGHTS」「フリートーキングテーブル」の2つのイベントを開催し、抽選に当選した方が参加しました。

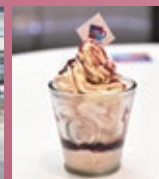
カフェでは、ご来店のお客様向けにオセアニアのデザート「パブロバ」のオリジナルメニュー、「ビターコーヒーパブロバ」や、英語で願い事を書いて飾る「Wishing Tree」を用意。SNSに投稿してくださった方には、オリジナルクッキーをプレゼントしました。また、カフェの脇にある本棚には、TOEIC関連の書籍や、「SPEAK UP NIGHTS」のテーマである「旅」「グルメ」「音楽」に関連した洋書の展示も行い、英語に触れることができる空間を演出しました。



Komin CafeがTOEIC ENGLISH CAFÉ仕様。



「Wishing Tree」には、お子さんから社会人の皆さんまでさまざまな願いが寄せられました。



オリジナルメニュー「ビターコーヒーパブロバ」

## 人気DJと英語で楽しく話すイベント「SPEAK UP NIGHTS」

大阪のラジオ局FM802とFM COCOLOの人気DJ3名が日替わりで登場し、ナビゲーターとなって英会話を楽しむ「SPEAK UP NIGHTS」。1日目の大抜卓人さんは「旅」、2日目のMEMEさんは「グルメ」、3日目の落合健太郎さんは「音楽」、とそれぞれのテーマに沿ったトークを進行しました。まずはDJがスライドショーを交えながら、自身のエピソードや思い出話を紹介。参加者からのアンケートをもとに、ときに参加者と冗談を交えながら会話するなど、会場は大いに盛り上がりを見せました。

後半は、同じテーブルに座った参加者同士で、各テーマに合わせたトークセッションを行いました。互いに初対面のため、英語で自己紹介するところからスタートしましたが、次第に打ち解け、会話が弾んでいました。

参加者からは、「最初はドキドキしていたが、すごく楽しく過ごせた。皆さん積極的に話してくださって面白かった」、「大好きな

DJさんのイベントだったので、楽しみにしていた。名前を呼んでもらったり、お友達のように声をかけてもらったりしたのは初めて」など、喜びの声が届けました。



## DJの皆さんからコメントをいただきました

### 大抜卓人

アメリカの大学を卒業後、現地のテレビ番組制作会社に勤務。FM802のDJとして15年間以上活躍中。

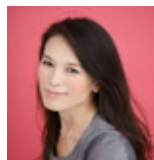


アメリカから帰国して18年ぶりに英語でのトークでしたが、リスナーさんとの英会話を通して英語だけでなく自分の夢を思い出すきっかけになりました。今回の参加リスナーさんはとても意識が高く、積極的に英語でトークされていました。最初は短いセンテンスでもとにかくトライすることだと思います。

Go for it and find your own style!  
Speaking English will open so many doors for you!

### MEME

神戸生まれ、神戸育ちの在日華僑3世。25～27歳までアメリカで過す。現在、二児の母であり、FM COCOLOでDJを務める。



英語で話す機会を持つという意味で大成功だと思います。参加者の皆さまが一所懸命話そうとされている姿に感動を覚え、同時に刺激を受けました。語学習得するには「話す」「使う」ことが一番大切だと思います。伝えようとする気持ちと、あとは地道な学習が大事。私も頑張ります！

### 落合健太郎

13年間にわたる海外生活を経験。FM802のDJとして、高校生からビジネスパーソン、OLと幅広い年代で支持を受ける。



素晴らしい機会をありがとうございました。「英語を楽しく!」ということを中心にトークさせていただきましたが、参加者の皆さんがとてもイキイキと英語を話している姿を見て感動しました。英語は苦手・・・という人が多い日本。でも通じたら楽しい!という経験をすることが英語上達の近道だと思います。

Don't Be Afraid!

## 東京と大阪で高校生対象の エッセイライティングワークショップ開催

### ネイティブによる講義とディスカッション、英語漬けの6時間

7月26日・27日と大阪・東京にて高校生を対象とした「IIBCエッセイコンテスト」応募者向けに、エッセイライティングワークショップが開催されました。ワークショップでは、構成のポイントや使える表現など、エッセイの書き方を講義で学んだ後、与えられたテーマに沿って実際にエッセイを書きます。講義中はグループワークなどもあり、書いたエッセイに対しては、ネイティブの講師による個別添削とアドバイスが受けられます。大阪の講師には、大阪大学外国語学部のRichard Leigh Harper氏、近畿大学法学部のJeremy McMahon氏を迎え、男子4名、女子16名が参加。東京の講師には、立教大学経営学部国際経営学科のGene Thompson氏と同大学同学部のNerys Rees氏を迎え、男子9名、女子16名が参加しました。

本ワークショップの特徴の1つが、すべての講義が英語のみで行われることで、まずはアイスブレイクとしてゲームや自己紹介で緊張をほぐします。大阪では、講師の出身地や趣味を当てるゲームで、グループで協力しながらゲームを進めていきました。東京では「ペアになり自己紹介をしながら、お互いの共通点を探す」というテーマで、アイスブレイクが行われました。参加者の英語レベルはとて高く、テーブルを超えて英語での会話が弾んでいる様子も見られました。

緊張がほぐれたところで、実際にエッセイを書く上でのポイントについての講義が始まりました。エッセイの例を見ながら、英語でのディスカッションも行われました。

午後からは各人が自分のエッセイに取り組みます。講師に質問をしたり、グループ内で相談したりしながら、それぞれが真剣に取り組んでいました。

エッセイを書き終わり、個別に講師による確認とアドバイスを受けた後も、時間ぎりぎりまでエッセイのブラッシュアップをするなど、熱心な参加者が印象的でした。



東京会場



大阪会場

### 講義、ライティング、アドバイスで、コンテストへの参加意欲が高まる

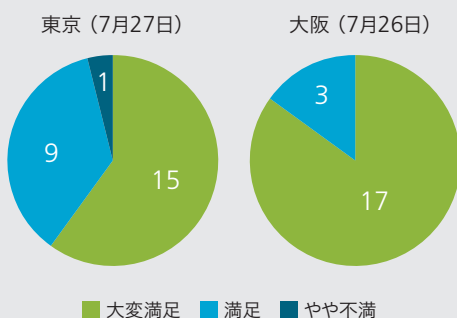
参加者アンケートによると、本ワークショップに参加した理由は「エッセイの書き方を学ぶため」(東京17名、大阪9名)、「先生の勧め」(東京12名、大阪9名)が多くなっており、本ワークショップ参加前からエッセイコンテストへの応募を意識していた人は半数以下(東京8名、大阪7名)でした。しかし、ワークショップ終了後のエッセイコンテストへの応募意向は、「とても参加したい」(東京8名、大阪7名)、「まあ参加したい」(東京10名、大阪10名)と参加意向が急上昇。「初めから参加予定」(東京4名、大阪2名)を加えると、ほぼ全員

がエッセイコンテストへの参加意欲を見せる結果となりました。

プログラムに対する満足度も、講義、ライティング、アドバイスといずれも「非常に参考になった」という回答が多く、具体的にエッセイの構成やポイントについて教わったことが役立ったと感じていました。

年々参加者の英語レベルも上がってきており、エッセイの書き方だけでなく、あらゆる面において相互に刺激し合う場となりました。

#### ワークショップへの満足度



#### 感想・意見(一部)

- エッセイの書き方を細かく丁寧に講義していただき、わかりやすかった。また、他の学校の人も交流できて、楽しく英語を学べた。
- 学校では、先生に1対1でチェックしてもらうことはないが、細かいところまでご指摘いただき、今まで日本語でも英語でも苦手意識をもっていたエッセイのモチベーションが上がった。
- 初めは何を書けばいいのかわからなかったけれど、先生方にたくさんアドバイスをいただいていたエッセイの形ができてきたのでよかったです。

- 6時間半も英語漬けで耳が英語に慣れた気がしてよかったです。
- 今回のワークショップではこのエッセイコンテスト限定ではなく、英作文の問題やTOEIC S&Wの対策にもなりとても汎用的だった。
- 同い年の子どもたちがみんな英語が上手くて、今回とても良い刺激になったと思う。また今回のテーマについてじっくり考えることができた。
- 帰国子女、留学経験者などの流暢な発音に触れ、刺激を受けた。

## TOEIC®セミナーレポート

### 「大学の英語教育改革」をテーマにした実践例を紹介

7月28日、東京にて、「大学の英語教育改革 × TOEIC Program ～学習意欲を高め、英語力向上を目指す多様な取り組み～」をテーマに、TOEICセミナーが開催されました。大学の英語教育にTOEIC Programを活用している事例として、広島大学、京都産業大学、東京都市大学の取り組みが発表されました。

広島大学からは「スーパーグローバル事業でのTOEIC Programの活用およびCan-Doリストの開発」と題した発表がありました。全新入生に対するTOEIC L&Rに基づく個人別到達期待値の設定など、きめ細かに英語学習の指針を提示することで、英語力の底上げ等に効果が表れています。また、IIBCと共同でCan-Doリストを開発し、学生の英語学習のモチベーションアップをはかっています。

京都産業大学の共通英語プログラム改革のポイントは以下の3点。第1は「実用的な英語運用能力の向上に焦点を絞る」というもので、日本人教員の担当クラスはTOEIC Programを導入し、ネイティブ教員の担当クラスはコミュニケーション能力の向上に焦点をあてます。第2のポイントは「授業の質の保証」であり、統一カリキュラムで少人数制クラス編成にするなどの改革を行いました。また、教員研修会(FD)も学内で開催しています。第3のポイントは「学習成果の明確化」で、入学時にTOEIC Bridge Testでクラスを振り分け、後期試験では定期試験としてTOEIC L&Rを実施、そのスコアによってクラスを再編成するため、上のクラスを目指すことが学生のモチベーションの1つとなっています。

東京都市大学は、1年次の準備教育と2年次の約5カ月の留学を合わせ、実践的な専門力と自主性・自立心を高めることを目指した「TAP」という独自の国際人育成プログラムを開発しました。英語教育を実施するとともに、TOEIC L&Rは入学時、出発時、帰国時の3回、TOEIC S&Wは出発時と帰国時に実施し、成果を測定しています。初年度から定員を超える応募があり、TAPを目的に同大学を受験する学生もいるそうです。学生からの満足度も高く、英語力の向上を参加した学生の9割近くが実感し、海外インターンシップや留学などにチャレンジしたいとの意向を8割近くの学生が示しています。

会場を埋めた190名の参加者は、こうした新しい取り組みを熱心に聞き入っていました。



## Propell® Teacher Workshop

### 4技能につながる基礎力を鍛える指導法ワークショップ開催

ETS (Educational Testing Service) が開発した英語指導者向けのプログラムPropellをワークショップ形式で学ぶことができる、Propell Teachers Workshop。本年はETSよりファシリテーターとしてElizabeth Bredlau氏、Tonia Peters氏を迎え、7月下旬～8月上旬にかけて東京・大阪にて開催しました。



ETSはTOEIC Programの開発・制作のほかに、それぞれのテスト内容にあわせて、英語教育指導者を対象にどのようにクラスを運営するか等指導方法を教える活動を行っており、ワークショップはその一環で行われています。

今回はTOEIC Speaking & Writing Testsについてのワークショップを開催。午前中はアイスブレイクとして自己紹介からスタート。そのあとテストの概要や採点基準、学習目標の設定の仕方を2人のファシリテーターが、時に参加者からの質問に答えを挟みながら解説しました。特にTOEIC S&Wの設問が、ミーティング、電話、メールなどの実際のビジネスのシチュエーションに即したテスト形式になっているという解説に大きくうなずく参加者もいました。

ランチをはさんで、午後は実際の授業にTOEIC S&Wを、どのように取り入れていくか、各チームごとにディスカッションしたり、TOEIC S&Wの解答例を用いた採点体験を判断するアクティビティを行いました。質問や意見も活発に飛び交う場となり、参加者同士でも情報交換や交流が進む有意義な機会となりました。

## 公開テストスケジュール

### TOEIC® Listening & Reading Test



回数	試験日	申込期間※ <sup>1</sup>	結果発送予定日
第227回	2018年 1月 28日(日)	2017年 11月 9日(木) ~ 2017年 12月 14日(木)	2018年 2月 27日(火)
第228回	2018年 3月 11日(日)	2018年 1月 4日(木) ~ 2018年 1月 30日(火)	2018年 4月 10日(火)

### TOEIC® Speaking & Writing Tests

#### TOEIC® Speaking Test



試験日	申込期間※ <sup>2</sup>	結果発送予定日
2017年 12月 3日(日)	2017年 10月 20日(金) ~ 2017年 11月 17日(金)	2017年 12月 27日(水)
2018年 1月 21日(日)	2017年 12月 1日(金) ~ 2018年 1月 10日(水)	2018年 2月 15日(木)
2018年 2月 18日(日)	2017年 12月 28日(木) ~ 2018年 2月 2日(金)	2018年 3月 14日(水)

### TOEIC Bridge® Test



回数	試験日	申込期間※ <sup>2</sup>	結果発送予定日
第66回	2018年 3月 18日(日)	2017年 11月 9日(木) ~ 2018年 2月 15日(木)	2018年 4月 20日(金)

\*上記は個人でお申し込みいただく際の申込期間です。団体一括試験申込期間(TOEIC Speaking Testを除く)は公式サイトでご確認ください。

また、公開テストスケジュールは変更されることがございますので、最新の情報は公式サイトでご確認ください。

(※1)インターネットでの申込期間です。申込開始および締切時間、コンビニ端末申込については公式サイトでご確認ください。

(※2)インターネットでの申込期間です。申込開始および締切時間は公式サイトでご確認ください。



一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会  
The Institute for International Business Communication  
IIBC 公式サイト <http://www.iibc-global.org>

#### 【お問い合わせ】

東京 東京都千代田区永田町2-14-2 山王グランドビル TEL. 03-5521-5901  
名古屋事業所 愛知県名古屋市中区錦2-4-3 錦パークビル TEL. 052-220-0282  
大阪事業所 大阪府大阪市中央区博労町3-6-1 御堂筋エスジービル TEL. 06-6258-0222

#### 【報道関係お問い合わせ】

広報室 東京都千代田区永田町2-14-2 山王グランドビル TEL. 03-3581-4761